

思い出

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に①

今年も、阿寒の里にタンチョウが舞い降りる季節になりました。国の特別天然記念物に指定されて来年で60年。今でこそ、道内に生息するタンチョウは千羽を超えたと言われていますが、かつては絶滅の危機にさらされていました。今回から、阿寒で戦後間もなくから続くタンチョウ保護活動の足跡をたどります。

1950年(昭和25年)1月のある朝。町内で農業を営んでいた故山崎定次郎さん(75年死去)が畑に出ると、トウモロコシの「においの周りに数羽のタンチョウが集まっていました。あまりの美しさに見とれながら、枯れた茎を必死でついでむタンチョウの姿に「腹が減っているんだな」と気づきました。そこで翌朝、トウモロコシを抱えて畑に立ち、タン

## 山崎定次郎さん

阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

「臆病な鳥だ。わしが怖いのか」。山崎さんは渋々自宅に戻りました。窓から畑を眺めていると、やがて雪原におそるおそるタンチョウが舞い降り、トウモロコシをついばみ始めました。「やった! タンチョウがわしの餌を食べた!」。大きな歓声が部屋に響きました。

この日から、山崎さんの給餌活動が始まりました。奥さんも食糧不足の時代。奥さんは「売るトウモロコシまでなくなってしまう」とこぼしたそうですが山崎さんは聞き入れず、毎朝こう言って畑に餌をまいたそうです。

「ツルよお。おまえらは本当にきれいだなあ。死んだらだめだぞお。ほうらい



よしだ・もりひと 1949年阿寒町生まれ。阿寒中に在校中に生徒会役員としてタンチョウの保護活動に参加したのが「鶴との出会い」。北海道自動車短大卒。自営業。2005年に阿寒タンチョウ鶴愛護会2代目会長となる。

## 給餌活動の先駆けに



タンチョウに給餌する山崎定次郎さん (阿寒国際ツルセンター所蔵、年代不詳)

つばい食べるよ」  
飢えた生き物への深い愛

情が、阿寒のタンチョウ保護活動の始まりでした。2年後の52年、大雪と寒波に見舞われ食料を失っていたタンチョウを救った各地の給餌活動の先駆けとなったのです。

# 思い出

## 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に②

### ツルクラブの誕生

阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

1957年(昭和32年)、阿寒中に2代目学校長として故大井健次先生が赴任しました。その年の10月23日、大井校長が学校林の草刈りを終えて校舎に戻る途中で、4羽のタンチョウが電線をかすめて青空を羽ばたき、ねぐらへと急ぐ光景を見たのです。

大井校長がその姿を見たのは、この日が初めて。「このように素晴らしく美しい生き物が、阿寒にいる」と感激しました。

当時はタンチョウが絶滅の危機にあった時代。大井校長は「本校の教育活動に、タンチョウの保護と生態研究を取り入れることはできないだろうか」と生徒や教員に相談したところ、「毎日ツルを観察する『ツルクラブ』をつくらう」という

### 校長提案受け生徒が観察



昭和30年代後半、タンチョウを観察する阿寒中ツルクラブの生徒たち。当時、北海道新聞カメラマンの岩松健夫さんが撮影した(阿寒中所蔵)

答えが返ってきました。メンバーは、町内でタンチョウが飛来する13地区に住む16人の生徒たち。その年の11月、観察を始めました。

「11月12日午後1時30分晴 4羽 吉田さんの畑70畝 畑にこぼれていた大豆を食べていた」 「12月13日午後2時晴 6羽 うちの

大根畑200畝 しなびた大根を口にしておどった」 などと、天候や飛来数、ツルの位置と自分との距離まで克明に記した記録は「ツルの日記」と名づけれられました。ある男子生徒は、日記に当時のツルの様子をこうつぶづっていました。

「タンチョウツルは宵っ張りで朝寝坊だ。だから、

僕たちが野ウサギを捕らえるためにかけたワナを朝早く見回りに出掛けるころには、ツルは寝ている。たいして群れをなして川の浅瀬に立っている。首はどこにあるのか分からないように羽の下に入れてあるが、必ず見張りのツルが何羽かいて、首をすっくりと立て

# 思い

## 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に③

### 鶴の日記

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

1957年(昭和32年)に大井健次校長の提案で阿寒中にツルクラブが誕生してから3年後の60年5月、同校から小冊子「鶴の日記」が刊行されました。この写真は、札幌大病院に入院中の大井先生が、阿寒から生徒と教員が持ってきてくれた完成したばかりの「鶴の日記」を手に喜ぶ姿です。

大井先生は、ツルクラブ発足後は自身も毎日ツルクを観察し、生徒たちの観察記録「鶴の日記」を「後世に残すべきだ」と冊子化の準備もしていました。

58年10月に、神戸市で開かれた全国中学校校長研究大会でその内容を発表。大きな反響を得た足で、ナベツルが飛来する山口県周南市の八代盆地、マナツルで知られる鹿児島県出水市を

## 観察記録「後世に残すべき」

訪ねて情報交換を行い、阿寒に帰った直後に倒れて入院しました。

大井先生は休職のまま、59年4月に3代目校長の一戸敷先生が赴任し、教員や生徒たちと一緒に大井先生に代わって「鶴の日記」の冊子化を実現させたのです。

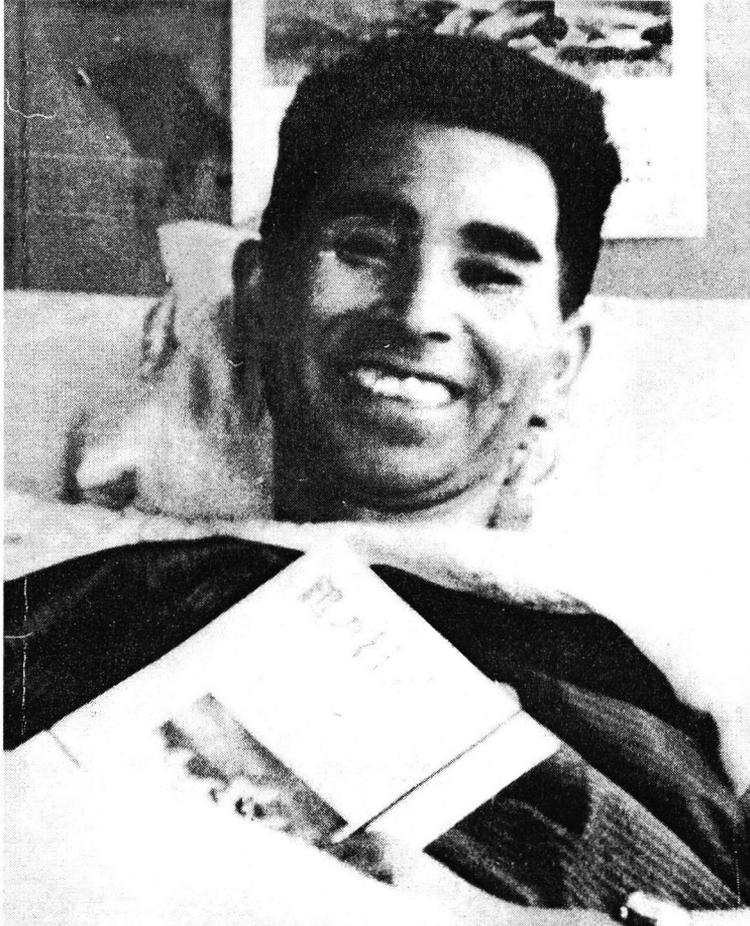
冊子には生徒たちの観察

記録、詩や作文と一緒に、大井先生が記した「教師の『鶴日記』」も掲載されました。こんな一文があります。

大井先生は10年間入院生活を続け、69年8月に他界

個の雪を払い、付近の除雪後スキーで踏み固め給餌すれば三羽、三羽の二組早や寄り進む」

昭和33・2・4・晴後雪 生徒二十名スキー、ス コップ用意、上阿寒の丹頂 鶴の給餌場の除雪に向かう。トウモロコシのお八す。



1960年5月、入院中の札幌大病院で阿寒から届いた「鶴の日記」を喜ぶ大井健次阿寒中2代目校長

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に④

阿寒中では、1960年（昭和35年）にツルクラブの活動をまとめた文集「鶴の日記」を発行して以降、生徒たちに変化が起きていました。

礼儀正しくなり、生徒同士のがみ合いも減り、非行もなくなりました。文集により、阿寒中の活動が地域内外に認められたことが、生徒の自信と誇りにつながったのでしょうか。

私は62年に阿寒中に入学しました。ツルクラブではありませんでしたが、同級生に熱心な男子部員がいて、授業中もノートにツルの絵を描いてはかりました。羽根の付き方がどうだ、足の形はこうだーと生懸命

## 生徒が餌確保

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

かなり詳しくて、みんなに「ツル博士」と呼ばれていました。

ツルクラブの部員は、町内のタンチョウ飛来地で給餌をしていましたが、餌の多くは、農家の子が親の目を盗んで家から持ち込んだトウモロコシでした。活動に励むほど、餌は不足しました。

しかし、64年1月、ツルクラブの活動がNHKの全国放送で紹介されたのが転機になりました。全国から餌や寄付金が届くようになったのです。

そうした浄財やテレビの出演料などを合わせて「ツル基金」を創設。その年の春、中阿寒に池を掘り、阿寒川でつかまえたドジョウを放流して養殖を始めました。すると今度は、大阪から100キロものドジョウの稚魚が送られてきました。

善意に感謝する一方、部員から「いつまでも他人に

## 養殖、栽培に自ら汗流す



頼るのは良くない」という声も上がりました。67年5月、校内の10坪の荒地地に自分たちでくわを入れ、トウモロコシ栽培を始めたのです。

私が、もう半世紀近くタチョウにこだわり続けているのは、中学時代にツルクラブの奮闘を間近に見てきたことが根源だと思えます。

1964年春、全国からの寄付金でドジョウを養殖する池を造る阿寒中ツルクラブの生徒たち（伊藤博通さん提供）

# 「日本の鶴」

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

## 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑤

1964年（昭和39年）

12月15日、阿寒中ツルクラブが小冊子「日本の鶴」を発行しました。タイトルは、タンチョウの学名「グルス・ヤボネンシス」の和訳からとりました。

小関拓美部長を中心とする31人の部員と、顧問の伊藤博通先生がその年の3月から9カ月かけて編集しました。64年1月にツルクラブの活動がNHKのテレビ番組で全国に紹介されて以来、各地から餌や寄付金、激励の手紙が430件も届

## 生態解説、作文 小冊子に

き、「お礼にツルの記録を送ろう」と考えたのが発端でした。

タンチョウの美しい姿を捉えた写真や生態を解説する図のほか、湿原での巣づくり、誕生から成鳥となる

までの観察記録、生徒たちがツルを迎える気持ちをつづった作文などがA5判82ページにまとめられています。

ツルが縁で姉妹校となった鹿兒島県野田村（現出水

市）の野田中学校と山口県熊毛町（現周南市）の八代中学校からも、両校周辺に飛来するナベツルやマナツルの観察記録をもらい、掲載しました。

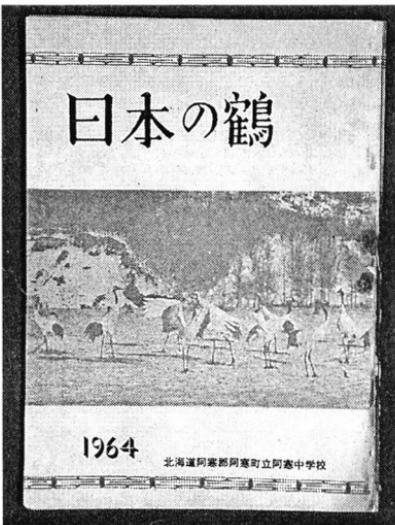
伊藤先生は「9カ月間、毎晩、生徒たちの観察記録と作文の山の整理に追われましたが、全国のツルを愛する人たちの善意に感えたくて、夢中でした」と当時を振り返ります。

完成予定の日、雄別炭山の印刷所からなかなか冊子が届かず、伊藤先生が待ちきれずにバイクを飛ばして印刷所まで受け取りに行き、完成品を手を生徒たちとケーキを囲んだお祝いの会をしたそうです。

「日本の鶴」を、支援物資やお金を送ってくれた人たちと姉妹校2校に送ったところ、さらに餌や寄付金が届いた上、野田中学校からは「ツルの世話、大変でしょう」と、鹿兒島名産のザボン一箱が送られてきました。

こうして、タンチョウの生態とその価値が、中学生の手で少しずつ全国へと伝えられていったのです。

◇ 次回は1月13日に掲載します。



1964年、ツルクラブが発行し全国に発送された「日本の鶴」

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑥

阿寒中ツルクラブは1964年(昭和39年)12月に、タンチョウの生態研究とクラブの歩みをまとめた小冊子「日本の鶴」を発行。全国から寄せられた700件を越す寄付や餌へのお礼として、年明けから早速、各地に発送を始めました。ところが、そのお返しにと、さらに山のようにプレゼントや寄付が届くようになり、顧問の伊藤博通先生はお返しに頭を痛め、生徒たちも礼状書きに手が回りきらなくなってしまうました。

加えて、こんな珍事もありました。あるテレビ局の全国放送の番組が「タンチョウの好物は茶殻」と紹介したのです。これは、とん

## タンチョウ鶴愛護会発足

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

でもない間違い。タンチョウは食べません。

ところが、そうとは知らない善意の方たちから「病院ぐるみでためたものです。かわいそうなツルにあげてください」「老人クラブで毎日のように集めたものです」などと書いた手紙を添えた、茶殻の詰まった段ボール箱が連日学校に届くようになったのです。

タンチョウ保護は、大切な活動ではありましたが中学生の本業は勉強。当時は、高校受験も厳しくなってきたころでした。クラブ活動が忙しくて家庭学習ができなくなってしまうたら「本末転倒」と学校も悩み、町教委に「生徒による保護活動には限界がある。地元の大人の協力も必要」と訴えました。

それをきっかけに65年11月30日、「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」が発足し、全国からの善意の受け入れ窓口となりました。生徒たち

## 中学生の頑張りに応え

の頑張りが、大人たちを動かしたと言えるでしょう。当時、事務局を担った町教委は、茶殻を送ってくれた方たちに事情を書いたお礼とおわびの手紙を出すのことに、てんてこ舞いとなりました。



1965年、小冊子「日本の鶴」を全国の協力者に発送するツルクラブの生徒たち。阿寒町タンチョウ鶴愛護会発足のきっかけになった(阿寒中所蔵)

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑦

話は少しさかのぼりま  
す。1957年(昭和32年)  
に誕生した阿寒中ツルクラ  
ブの活動は、翌58年には全  
道、全国へと知られるよう  
になります。

5月にタンチョウ愛護校  
として道知事表彰を受ける  
と、10月には神戸市で開か  
れた「全国中学校長会」で  
大井健次校長がツルクラブ  
の観察記録「鶴の日記」の  
取り組みを発表。これが大  
きな反響を得て、60年5月  
に発刊した小冊子「鶴の日  
記」は日本野鳥の会をはじめ  
、全国の研究者から注文  
が寄せられました。

うれしい便りは、その前  
にもありました。60年2月

## ツルクラブ 広がる活動

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

16日。鹿児島県野田村(現  
出水市)の野田中学校ツル  
クラブから、釧路教育局に  
「タンチョウの生態などを  
研究している学校があった  
らお知らせ下さい」という  
手紙が届いたのです。

野田中では、51年から学  
校周辺に飛来するナベヅル  
やマナヅルの研究が進めら  
れていました。

すぐに阿寒中から返事が  
出され、1カ月ほどたつと  
野田中から「姉妹校として  
共同研究しよう」という提  
案の手紙が届きました。阿  
寒からの返事はもちろん  
「承諾」です。3月には、  
互いのツルの観察記録と、  
マチの特産品を交換し合  
いました。ツルを縁に、南と  
北の中学生が結ばれたので  
す。

海外にも評判は広がりに  
ました。62年2月には、昭和  
初期に千島列島で生物調査  
を行ったスウェーデンの探  
検家バルクマン氏が、65年

## 海外も注目 研究者ら来校

10月には米国の鳥類研究者  
「スト」のアジア編集局長も  
ウォルキンシヨウ夫妻が来  
69年4月に来校。阿寒の子  
校し、ツルクラブの生徒と  
懇談しました。米国の総合  
雑誌「リーダーズダイジェ  
」からも注目を浴びるよう  
になったのです。



1950年代後半、タンチョウの羽根を前に生態研究を  
進めるツルクラブの生徒たち(阿寒中所蔵)

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑧

「3月5日に第2回タン  
チョウ祭があります。先生  
1人と生徒2人をお招きし  
ます。どうぞおいで下さい」

1967年(昭和42年)  
の初め、阿寒中は山口県熊  
毛町(現周南市)熊毛中学  
校にこんな招待状を送りま  
した。

熊毛中周辺にはナベツル  
が飛来し、生徒たちによる  
観察が行われていて、61年  
に両校は姉妹校の縁を結び  
ました。以来、ツルについ  
ての研究成果や、校内の生  
活や町の様子を撮った写真  
の交換などを続けていまし  
た。

タンチョウ祭には、阿寒  
中に何年もツルの餌を送り  
続けてくれたいた茨城県城

## 丹頂鶴音頭の誕生

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

里町の小松小学校の子供た  
ちも招かれました。阿寒中  
や釧路市民からは模型のツ  
ル、阿寒町民からは千羽鶴  
が両校に送られて、子供た  
ちは大変感激していまし  
た。

ところで、この第2回タ  
ンチョウ祭では、新しく作  
られた「丹頂鶴音頭」が発  
表されました。作曲は根室  
市出身の作曲家飯田三郎さ  
ん。作詞は藤田印刷(釧路  
市)の当時の社長、藤田久  
さんで「愛にこたえて  
丹頂鶴の群 ここに阿寒に  
棲みついた」などと歌っ  
ています。

振り付けは、釧路の花柳  
徳保さん。町内で戦後間も  
なくから給餌を始めた山崎  
定次郎さん宅の2階からタ  
ンチョウを観察し、さらに  
丹頂鶴自然公園の高橋良治  
園長(現名誉園長)から羽  
の動きを教わり、その優美  
な姿を再現する振り付けに  
知恵を絞ったようです。

この日、東京から駆けつ

## 優美な姿再現 町民親しむ

けた飯田さんが指揮する生  
バンドの演奏と歌に合わせ  
て、地元婦人会や青年団ら  
が舞を披露しました。  
その後、「阿寒町タンチ  
ヨウ鶴愛護会」が普及活動  
す。

を続け、2007年5月に  
は丹頂鶴音頭の保存団体  
「丹頂ほろろん会」も発足。  
その歌と踊りは、現在も阿  
寒の住民に親しまれていま



1974年9月、「第1回産業祭り」で行われた丹頂鶴  
音頭パレード(阿寒町行政センター所蔵)

# 吉川英治文化賞

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

## 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑨

「第4回吉川英治文化賞に選ばれました。ぜひ受賞してください」

1970年3月4日。阿寒中に突然、講談社から電話が入りました。「お受けします」と返事はしたものの、校内は「吉川英治文化賞ってなんだ」「聞いたことないぞ」と大騒ぎ。調べてみると、国民文化の向上に献身した人たちに贈られる権威ある賞だと分かり、生徒たちの驚きは大きな喜びに変わりました。

選考理由には、当時ですでに13年間も学校ぐるみでタンチョウの保護活動を続けてきたことや、その結果、かつて絶滅の危機にひんしたタンチョウの繁殖を助け、生息数の増加に貢献し、生徒たちへの教育効果も生

## 突然の朗報、緊張の授賞式



1970年4月11日、吉川英治文化賞授賞式に出席した阿寒中の生徒会長岡崎さんと副会長の野沢さん、三原校長(右から)

んだこと。またそれらを刺に、有名人がずらりと並んだ。町に「阿寒町タンチョウ鶴愛護会」が誕生したことが挙げられました。授賞式は4月11日、東京のホテルニューオータニで行われ、当時の生徒会長、岡崎圭子さんと副会長の野沢定弘さん、三原坂雄校長が出席しました。出席者は川口松太郎さんや石坂洋次郎さんら著名作家を中心へ、その後の、地元での報告会に、有名人がずらりと並んだ。これも、タンチョウ愛護の基礎を築き上げた2代目学校長の大井健次先生をはじめ、多数の先輩たちの努力のたまものだと私は思います。私たちは先輩たちの思いを受け継ぎ、阿寒のタンチョウツル、そして日本の、世界のタンチョウツルの愛護に努めなければなりません」

# 丹頂フェスティバル

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

## 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑩

「ツルの気持ちになつて、真冬の寒い夜、外で一晩過ごしてみるか！ かまくらなんか作ってよお」

1984年(昭和59年)、当時私もメンバーだった阿寒町商工会青年部地域活動委員会の中で、こんな声が上がりました。「春から秋はイベントあるけど、阿寒は冬の催しがないなあ」というつぶやきが始まりました。

その年の1月に「丹頂共和国」と銘打って、商工会青年部で阿寒町自然休養村の野営場を借り、まず公言通りにかまくらを作りました。それから、外に丸太を組んでキャンプファイア。炭火でジンギスカンやちゃんちゃん焼きも楽しみなが、外で夜通し語り合いました。

## 寒さ逆手にイベント化

…といっても、参加者15人のうち、朝まで残っていたのは私を含め3人だけでした。阿寒で生まれ育った私も、厳寒期に一晩野外で過ごすのは初めての経験。仲間とわいわい語り合ううちに、冷たい空気が心地よくも感じられたものです。

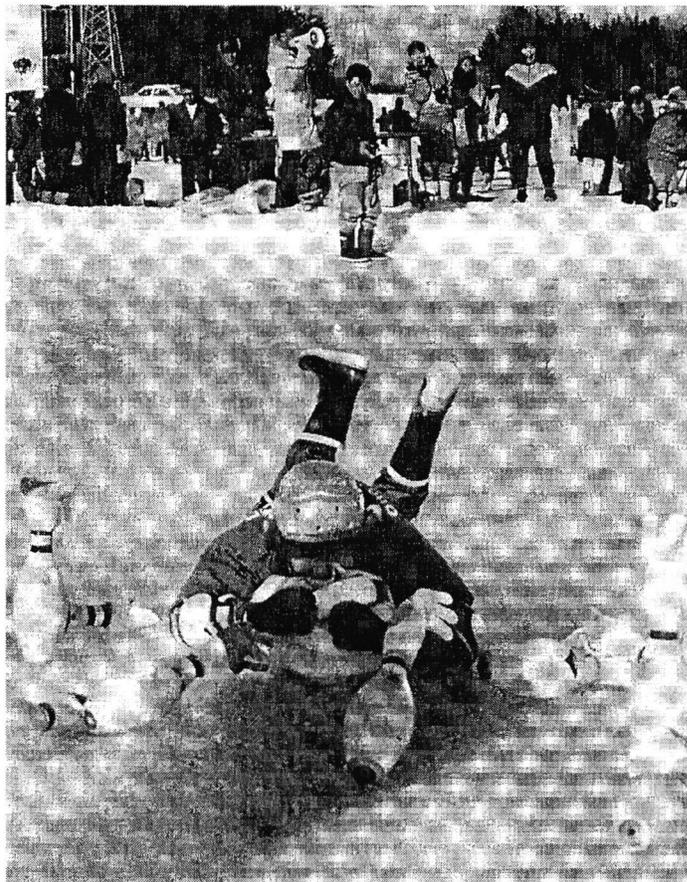
「もっと多くの人に、ツルが舞う冬の阿寒の寒さを楽しく味わってもらおう」と、翌年からは商工会青年部を中心とする実行委員会として、「丹頂フェスティバル」と名付けたイベントを開きました。

かんじきでの雪原トレッキング、氷上をスライディングしてボウリングのピンを倒す「人間ボウリング」などのゲームのほか、ツルが川の中で眠る気持ちも味わってもらおうと、ドラム缶を風呂おけ代わりにした「雪上五右衛門風呂」もやりました。

「人間ボウリング」で盛り上がった「丹頂フェスティバル」。阿寒町内外から1500人が詰めかけた。1990年1月21日

3年目の前夜祭の途中、ふと見ると瓶の中の焼酎が凍っていて、あらためてツルの季節の寒さに驚かされました。

…とみたところ大好評。寒さを吹き飛ばす盛り上がりとなりました。



# 鶴の酒

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

1986年の第2回丹頂フェスティバルから行ったユニークな取り組みに、「鶴銘柄酒の試飲会」というのがあります。当時、全国に「鶴」や「丹頂」の名の付く日本酒が170種以上ありました。

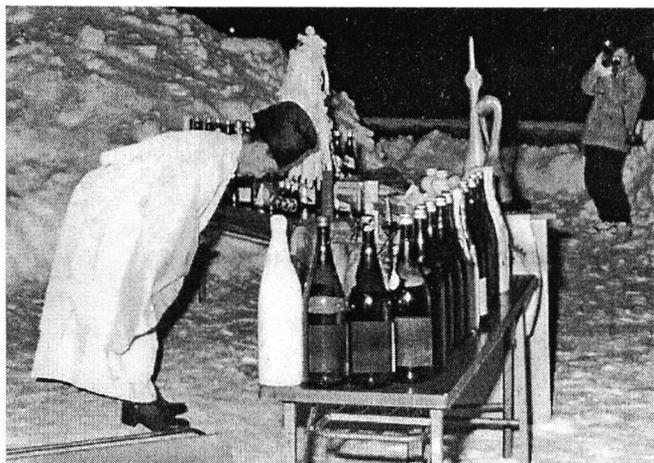
そこで各蔵元に、阿寒がタンチョウの舞う町であること、「丹頂フェスティバルで神前に奉納し、貴社の発展も祈願させていただきたい」との趣旨を書いた手紙を出してみたところ、札幌市の「千蔵鶴」に始まり、兵庫県香美町の「香住鶴」など、全国の60を超える蔵元が鶴の銘柄の酒を寄贈してくれました。

ずらっと並んだ一升瓶に向かつて、地元の神社の宮司らに祝詞を上げてもらっ

## 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に①

## 全国から一升瓶ずらり



①丹頂フェスティバル会場に並んだ全国の鶴銘柄の日本酒②氷の特大ジョッキで「鶴の酒」を味わう町民（いずれも1980年代後半）

た後は、水で作った特大ジョッキをコップ代わりに飲み比べをしました。「鶴」の縁でつながった各地の酒は、どれもそれはうまかったです。

2004年に丹頂フェスティバルが終了し、鶴銘柄酒の試飲会も姿を消しましたが、一昨年12月、タンチョウへの給餌が始まって60

で毎年、活動資金に30万円ずつ寄付してくれていました。今年の3月29日、タンチョウが国の特別天然記念物となって60年になります。その記念として、来年3月までの1年の間にまた、全国の蔵元の酒を阿寒に集める工夫をしたいと思います。

思し

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑫

丹頂フェスティバルのメインイベントとなった「丹頂結婚式」は、1988年（昭和63年）1月16日の第5回のフェスティバルから始まりました。

一度つがいになると生涯寄り添うタンチョウの夫婦にならない「千年の愛」を誓ってもらおうと全国から参加者を募ったところ、7組が集まりました。

当時、私は実行委員長。「阿寒を全国にアピールする絶好のチャンス」という意気込みで釧路空港に横断幕を持参し、参加カップルを出迎えたものです。

初回はツルを刺激しないように、夜に行いました。結婚式場は、休養村野営場の池の縁に作った特設ステージ。その上には、金びよ

## 丹頂結婚式

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

うぶに代えてキラキラ輝く雪と氷の壁を作りました。新婦は、スキーウエアの上にウエディングドレス。カップルが持つたいまつに、アイヌの古老がおこした火種から点火し、7組で特大のキャンプファイアに火をともしました。白銀で燃え上がる炎は、それは幻想的な光景でしたが、実はこの炎は、寒さ対策でもありました。

4回目からは、日中に「タンチョウ観察センター」の給餌場で行い、まさにタンチョウに見守られながらの結婚式となりました。以来、2001年まで50余組のカップルを迎えました。その後も交流が続き、苫小牧での本物の結婚式に招いてくれたカップルもいました。

93年の10回目では、前日の1月15日に釧路沖地震が発生し「丹頂フェスティバル」は中止としましたが、全国からのカップルのために結婚式だけは行いました。

## 保護からまちづくりへ



絶滅の危機にひんしたタンチョウの保護活動から、ツルを活用したまちづくりへと動きだした時代です。

第5回丹頂フェスティバルで行われた第1回「丹頂結婚式」。全国からの7組のカップルがツルの里で「千年の愛」を誓った＝1988年

# 人文字コンテスト

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

## 記憶の一枚

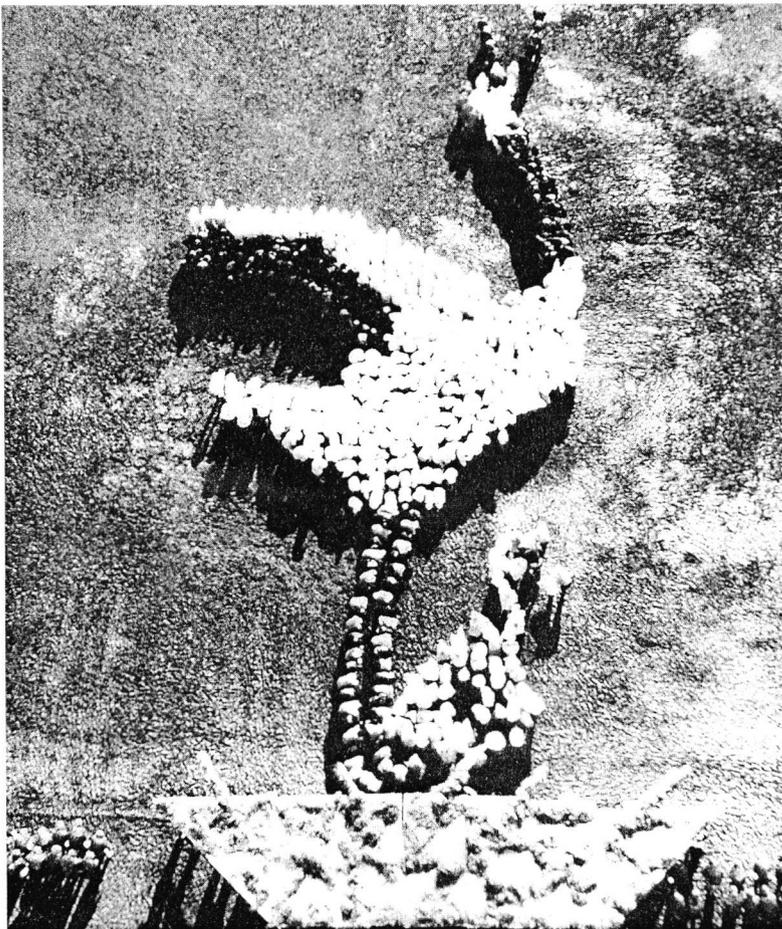
阿寒・鶴と共に⑬

人文字でツルを作ろう  
ー。1991年11月、そんな  
突拍子もないことに、マチ  
を挙げて取り組みました。  
日本テレビ系の人気番組  
だった「全日本人文字コン  
テスト」に応募することに  
したのです。「人文字」と言  
いますが、作るのは文字で

はなく、3分間の動画です。  
実行委員会が考えた題材  
は、実は最初は「朝顔の観  
察日記」でしたが、参加者  
を募っても、さっぱり集ま  
らない。テーマを「タンチ  
ョウが卵を抱いてひなが誕  
生するまで」に変更したと  
ころ、900人も応募が  
ありました。当時、阿寒町  
の人口は7千人でしたか  
ら、これはすごい数です。

阿寒中校庭での収録本番  
の11月23日。全員が、カラ  
ービニールで作った衣装を  
着て整列。呼吸を合わせて  
動かなければ、ツルの動き  
は表現できません。阿寒小  
の子供たちは、事前に学校  
の体育館で、何度も練習し  
てきてくれました。  
カメラが回る前に、全員  
で2度りハーサルをしまし  
たがなかなかうまくいきま  
せん。収録も、実は3度、  
撮り直してもらいました。

「鶴の愛情物語」という題  
名で放映されたのは、列が  
乱れ、卵から生まれたひな  
の形が崩れてしまった映像  
でした。  
テレビには、号令を出す



## 900人奮闘 グランプリ

リーダー役の「ひな頑張れ」という叫び声の流れ、じいちゃん、ばあちゃん、リーセントヘアの「ツツパリ」高校生たちが一緒に奮闘する姿が映し出されました。映像が終わると、スタジオの採点者たちが泣いていました。  
審査結果は何とグランプリ。阿寒町役場には、遠方で暮らす阿寒出身者から「ふるさとを誇りに思います」との手紙が多数届きました。タンチョウが、阿寒の人々の心を一つにしてくれたのです。



⑬阿寒中校庭に町民900人で作られた人文字。親鳥の足元にひながいる⑬学校の体育館で人文字の動きを練習する阿寒小の子供たち。ともに1991年11月

24.3.9

見

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑭

1997年11月9日、阿寒中の開校50周年記念式典が開かれ、「タンチョウとともに50年、そして…」をテーマにシンポジウムが行われました。

57年（昭和32年）のツルクラブ発足当時の顧問、沢出喜代司先生、後任の伊藤博通先生、ツルクラブの立ち上げを提案した2代目校長、大井健治先生の四女でツルクラブ部員でもあった渡辺（旧姓・大井）公子さんらがパネリストとなりました。

渡辺さんの話が特に印象的でした。大井校長とある真冬の夜明け前、一緒にタンチョウのねぐらを見に行っていた時、30分以上離れてい

## シンボル

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

ても「ツルを驚かせてはいけない」と、音を出さないよう指導されたそうです。

大井校長は、新聞や雑誌に、ねぐらにいるタンチョウをフラッシュをたいて撮ったと思われる写真が紹介されると、「タンチョウが人への恐怖心で卵を産まなくなるのではないか」と心を痛めていて、渡辺さんは「ツルに対する心配りを父に教えられました」と話していました。

また、クラブ発足当時はタンチョウの生態がまだ解明されておらず、資料や情報もなかったため、部員は自分たちで地道な観察を積み重ねていくことで、タンチョウを理解していったことを強調していました。

在校生や教職員もこうした話で、阿寒中とタンチョウのつながりを再認識し、翌年の秋、在校生が自分たちで育てたトウモロコシでグラウンドに二オを作って

## 飛来を願い校庭に二オ

立てたところ、クリスマスエフの日、数羽のタンチョウが舞い降りました。以来、現在まで毎冬、校

庭にはタンチョウのための二オが並び、阿寒中のシンボルとなっています。



渡辺公子  
伊藤博通

小関

1997年11月9日、阿寒中開校50周年記念式典で語る、故大井健治先生の四女、渡辺公子さん（左から2人目）

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑮

阿寒では、長年のタンチョウ保護活動の積み重ねで、今や子供たちにとってもタンチョウは身近な野鳥です。

阿寒小学校では、2001年2月に落成した新校舎の体育館の外壁にタンチョウが大空に舞い上がる姿と親子の仲むつまじい光景の絵を描き、前庭にはタンチョウのモニュメントを設置しています。

02年には生活科や総合的な学習の時間で、タンチョウと人の関わりを体験的に学ぶ学習を題材に取り上げました。子供たちが自分たちの手でタンチョウの餌となるデントコーンを育て、

## 阿寒小の取り組み

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

冬にはグラウンドにニオを作りました。「タンチョウとともに生活しよう」という試みです。その冬、校庭に初めてタンチョウが舞い降りました。

こうした活動が04年には学研の雑誌で全国に紹介されています。

昨年9月に釧路市動物園で開かれた、台湾に無償貸与された2羽のタンチョウの送別会では、阿寒小の3年生が「丹頂鶴音頭」を、5、6年生が合唱を披露し、旅立つ2羽にエールを送りました。

そして、今季も2年生が校庭にニオを作りました。自分の体より大きなデントコーンを運び、みんなで苦労して組み立てましたが、なかなかタンチョウが現れない。やっと姿を見せたのは12月28日。親子のタンチョウでした。

「これからも、全校でタ

## 愛護精神 未来へ伝える

ンチョウのことを大切に思い、見守っていききたい」。未来の担い手たちにタン1月末に町内で開催された「タンチョウ愛護の精神が受け継イイベント「丹頂の里千年祭」がれていることを、うれしで、児童会の代表がそう言うく感じています。



2年目のニオ作りで、苦労して作ったデントコーンを詰めてタンチョウの飛来を待つ阿寒小の子供たち。2003年11月

思い

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に ⑬

1996年(平成8年)4月、阿寒のタンチョウ鶴の発祥の地である故山崎定次郎さんの畑の横に、町が阿寒国際ツルセンターを開館しました。

専門の学芸員も配置され、タンチョウの生態や行動などを研究、発信する施設です。阿寒タンチョウ鶴愛護会の事務局も、センター内に置かれるようになりました。

そこで愛護会では、センターのPRを兼ねて翌年度から、元日の午後1時にセンター前に飛来するタンチョウの数を予測する、「阿寒丹頂の里鶴クイズ」を実施することになりました。

全国に応募を呼び掛けることで「タンチョウのマチ」

## 飛来数予測クイズ

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

として阿寒の知名度をアップさせることと、タンチョウ保護の意識を高めていくことが狙いでした。

正解者の中から抽選で一人に1万円相当の阿寒の名産品をプレゼントすることにしたら、初回で670人も応募がありました。その時の飛来数は146羽。ぴったり当たった人が1人いました。翌年には応募者は1384人に倍増し、こちらも驚きました。

ちなみに今年の正解は11羽。飛来数をカウントするのが「1月1日の午後1時」なので、語呂合わせでその数を書いた人が多かったのか、887人の応募のうち正答者は過去最多の24人となりました。この数字も「平成24年」と重なり、こちらも格別の縁起の良さを感じました。

抽選で選ばれた高知県の女性に、木彫りやエソシカ肉などの名産品を贈りました。

クイズは今年が15回目。

## 15年で1万8千人応募



応募総数は1万8千人を超え、ウの名が、しっかりと全国に発信されています。

今年の元日の午後1時に阿寒国際ツルセンター前に舞い降りたタンチョウ。111羽が飛来した

阿寒国際ツルセンター提供

思

# 記憶の一枚

阿寒・鶴と共に⑰

この写真は、2010年1月25日の北海道新聞夕刊1面に掲載された写真です。阿寒国際ツルセンターの給餌場で、タンチョウの餌のウグイを狙って舞い降りたオジロワシとのバトルの様子です。

掲載後、「こんなシーンを撮りたい」というカメラマンが道内各地からどっとセンターに押し寄せました。この光景は、給餌が行われる毎年11月から2月末まで見られ、その間の週末や祝日にはカメラマンが200人近くも給餌場に並ぶこともあります。海外からの方もたくさんいて、まるで外国にいるような錯覚に陥るほどです。

タンチョウに生きたウグイが給餌される午後2時が

## 集う天然記念物

釧路市阿寒タンチョウ鶴愛護会会長

吉田 守人さん

近づくと、どこからやって来るのか給餌場の上空をオジロワシが十数羽旋回し、給餌が始まった途端、われ先に「ウグイを狙って急降下。」

必死に餌を守ろうとするタンチョウとの闘いが始まり、カメラマンたちからは「ウォー」と声が上がります。タンチョウは国の特別天然記念物、オジロワシは天然記念物。希少動物同士のバトルが目の前で繰り広げられるのです。

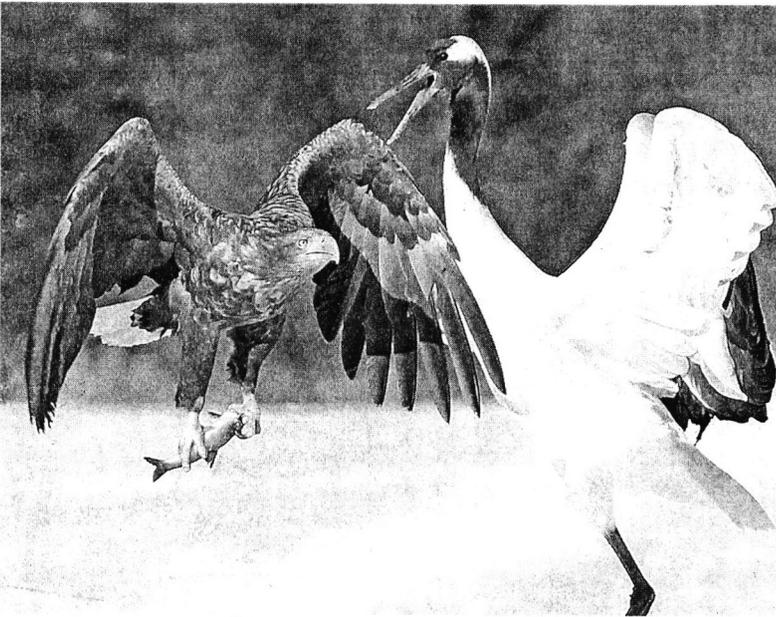
しばらくすると、今度はウグイをつかんだオジロワシを、やはり天然記念物のオオワシが追いかけます。全国、世界でも、こんな光景を間近に見られる場所はまれでしょう。これも長年、阿寒の住民が、タンチョウ保護を念頭に暮らしてきた証しと思っています。

29日で、タンチョウが国の特別天然記念物に指定されて60年を迎えました。私たちは「阿寒はタンチョウ

## ツルとワシ 餌の攻防戦

保護の発祥の地」という誇りを持ち、今後も活動していきます。そして阿寒がタンチョウにさらに千年、万年…と愛され続けることを願って、この章を終わりにします。

「阿寒・鶴と共に」は今回で終わります。次回からは、標茶町の菊地利長さん（熊牛探検隊長）の「標茶・磯分内を見つめて」を掲載します。



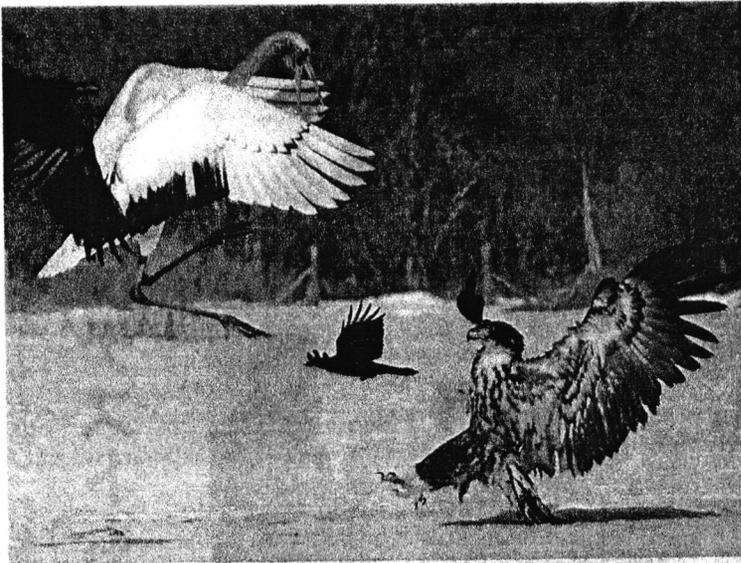
阿寒国際ツルセンターの給餌場で、タンチョウからウグイを奪い取るオジロワシ。2010年1月23日午後2時10分

# タンチョウvsオジロワシ

## 餌めぐり必死の攻防

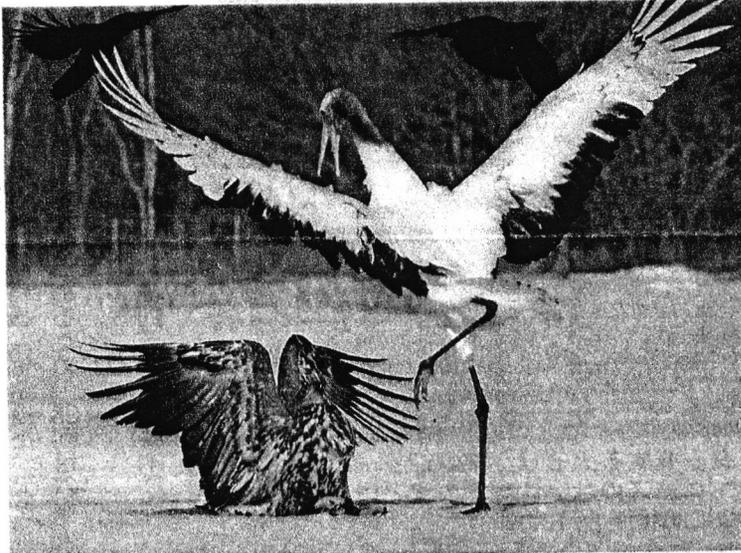
### 阿寒国際ツルセンター 幼鳥同士一騎打ち

釧路市の阿寒国際ツル 毎冬恒例の光景で、幼鳥 センター給餌場で繰り広 同士が一騎打ちする珍し げられる、特別天然記念 物のタンチョウと天然記 念物のオジロワシの攻 防。餌のウグイをめぐる



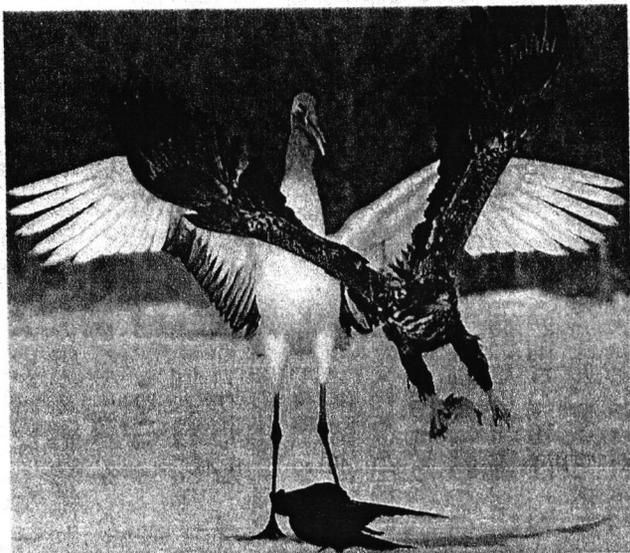
ウグイを自にかけて降り立ったオジロワシの幼鳥の 前に、そうはさせじとタンチョウの幼鳥(左)が 勇ましく躍り出た

「生」を懸けた戦いだ が、幼鳥同士どこかほほ 笑ましさも。タンチョウ の攻撃にたじろぎつつ、 なんとかウグイを奪って 飛び去るオジロワシの姿 に来場者からも「ホーツ」 っと、ため息が漏れた。 こうした瞬間を狙って 全国からプロやアマチュ



今にも蹴り出そうとするタンチョウ(右)の激し い威嚇にオジロワシもたじたじ

アのカメラマンも集ま り、約200人が連日、 センターを催す。 30分ほど離れた柵の外側 からカメラを構えてい る。(稲吉洋子) 給餌60周年を記念 13日にコンサート 釧路市の阿寒国際ツル センターは13日、人工給 餌60周年を記念して札幌 場料千円、問い合わせは 市出身の女性ボーカル二 同センター ☎0154・ 人組、Carin&Re 66・4011へ。



転んでもただでは起きぬ、しっかりとウグイをつ かねて飛び去るオジロワシを仁王立ちで見送るタ ンチョウ

雪 の中にー/凍り  
つく吹雪の中に  
/声をたがいに確かめ  
あって/タンチョウは  
生きている/雪の中に  
ー/キラキラ光る雪野  
原に/その姿 ほこら  
しげに/タンチョウは  
踊っている/雪の中に  
ー/夕やけにそまる地  
平線に/朝日の希望に  
声あげて/タンチョウ  
は歌っている/春はち  
かい/けがれない雪原  
をタンチョウは/歌う  
踊る はねる 鳴く  
走る/今日という日  
を生きて……/明日と  
いう日を喜んで……/  
生命ある躍動を/歌う  
踊る はねる 鳴く  
走る/雪の中にー

この「タンチョウの詩」の作者は、タンチ

## 2. 阿寒中ツルクラブ

# 給餌に青春 志は今も

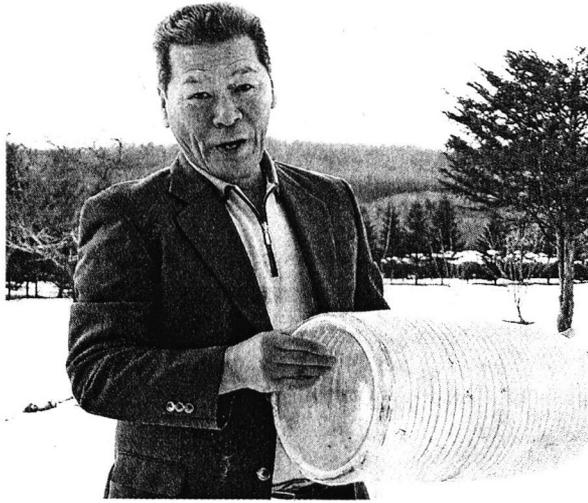
# タンチョウひと模様

ヨウの保護活動で全国的に知られた阿寒中ツルクラブの一員だった川田京子さん。高校2年となった1966年4月6日、クラブの取り組みを追ったNHKテレビの全国放送「明日は君達のもの」で、

小関拓美さん

詩が紹介され、初々しい感性に人々は心を打たれた。しかし、京子さんは放送から1カ月後の5月4日、帰宅途中に交通事故に遭う。「物心ついた時からツルばかり追っていた」

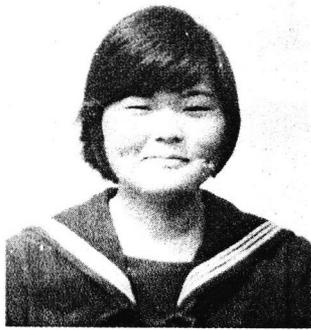
という少女は16年の短い生涯を閉じた。57年に発足したツルクラブは京子さんが在籍していた60年代半ばが活動の最盛期。校庭で給餌し、飛来数の調査を続ける生徒たちの姿は盛んにマスコミに取り上げられ、全国各地から寄付金が届いた。京子さんの同級生でクラブ部長だった阿寒町の元農協職員小関拓美さん(62)はその反響ぶりを「子供ながらに『朝晩、ツルを見てただけだよ』では済まないと思った」と振り返る。



小関さんも幼いころからタンチョウを間近に見て育った。鳴き声

を上げ、トウモロコシを食べるしぐさは「家で飼っているニワトリと変わらない」と思っただこともあった。でも、餌不足の時は「近所の小川でウグイを捕り、バケツに入れて自転車

で片道9キロを往復した」。クラブ活動に熱中する間にタンチョウを見る目も変わり、今は「あの気高い姿を見ると、つい目で追ってしまう」。



川田京子さん  
=1966年



伊藤博通さん

ク ラブ顧問として小関さんらを支えたのは、同校教師だった伊藤博通さん(80) 。